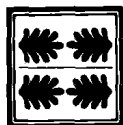


田中光二

南十字戦線





講談社文庫

みなみじゆうじせんせん

南十字戦線

たなかこうじ
田中光二

昭和56年 5 月15日第 1 刷発行

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 加藤製本株式会社

© Koji Tanaka 1981

Printed in Japan

0193-362025-2253 (0) 定価380円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

南十字戰線

田中光二

目次

プロローグ

第一章 招集

第二章 試験

第三章 始動

第四章 突破

第五章 籠城

第六章 戦闘

第七章 脱出

解説

七

二三

五一

八〇

一三七

一九四

二五六

三二三

北上次郎
三三七

南十字戰線

プロローグ

初めて人を射った時のことを覚えてるかというのか？
何事にも、初めての時というやつはある。

そのうちの一つだけが、特別ということはありえない。人間に対してM16の引き金を引いた時も同様だ。その瞬間は何も考えていない。文字どおり頭の中は空白……無我夢中というやつで、感情はあとからやってくるのだ。

そうして人間はどんなことにも慣れる。熱いちっばけな鋼鉄の塊かたまりが、人間の体をあつさり引き裂くことにも、そいつを他人に対してばらまくことにも慣れる。なぜなら、戦場ではそうしなければ生きていけないからだ。

なぜ、戦場に身をおく羽目になったのか？

その質問も無意味だ。おれは今、そこにいる。おれにとつては現在だけが重要なのだ。過去も未来も、この現在を切りぬけなければ、存在しえないからだ。

——辰巳たけみ勇は、ヘルメットをかぶった頭をかすかに振った。意識の隅で、奇妙に澄んだ音でやりとりされているその自問自答をふりはらった。そいつは、人格の分裂状態とでもいうべきもので、修羅場に放り込まれたとき、しばしば起こる。ふしぎな客観性が、緊張の反動によって心に

生じるのである。

そのわずかなヘルメットの動きを敵は見とがめたらしい。軽快な発射音のスタッカートとともに、横殴りの一連射が来た。湿った土に押しつけた頭の上を、草を千切りとばしながら、機関銃弾がかすめすぎた。

一九六九年十二月十日。ベトナム、ダナン南方のデルタ地方。名もない村外れの湿地帯。午後二時四十五分。

辰巳勇が伏せている草地の先を小さな川がよぎり、その向こうには密度の濃い、竹藪と喬木を交えたブッシュが広がっている。小川を徒渉しようとした寸前、ふいに掃射がそのブッシュから発せられた。伏せる瞬間、二人ほどの呻きを背後で聞いた。パトロール分隊のうち、三人はその一撃でやられた——経験につちかわれた直感で、そうさと思った。

釘づけになってから、たつぷり五分は経っているだろう。だが、事態を切りぬける見通しは立たない。ベトコンは、やはりパトロール隊程度の少数と思われ、武器も、軽機関銃以上の火器は持たない様子だったが、狙撃に絶好の位置を占めているらしい。わずかに身じろぎするたびに、狙い澄ました弾が飛んでくる。背後のブッシュまで、三十メートル近い距離を、一気に撤退するのは、出来ない相談だった。

辰巳は、ゆっくりと体を仰向けにし、上唇にたまった汗を舌先でなめた。狂気と絶望の味がした。人間は、恐怖を、塩からい汗というかたちで分泌するのだ。

ぎらつく亜熱帯の青空が目映った。乾季に特有のみごとに抜け切った青空だった。人間の営みに対する徹底した無関心さを、それは物語っている。

辰巳は、ふかく息を吸った。腋の下と背中が、水を浴びたように濡れているのが感じられる。M16を握る指も、油をぬりつけられたようにぬめっていた。

鋭い羽音とともに、黒い小さいものが、視界をよぎった。蚊だった。辰巳が体から排出する炭酸ガスを嗅ぎつけて、集まってきたのだ。小さくかぶりを振り、追い払おうとつとめた。が、むだだった。その吸血鬼たちは、辰巳たちの窮境を知りぬいているかのように傍若無人に集まってくる。

「……誰か……頼む……」

かすれた呻きが、前方から聞こえた。

分隊のキング軍曹の声だ。彼は、いつもの通り、分隊の先頭を切って、辰巳の十メートルほど前方を進んでいた。分隊長みずからが、ポイントマンを買って出ているわけだ。常用しているガンチャ（マリファナ）が、彼に理性を失わせているためばかりではない。生えぬきの職業軍人キングには、将校などにはない肝っ玉がある。

だがその彼も、今は射ち倒されている。のけぞり、草むらに沈んでいく姿を、辰巳は一瞬、前方にとらえたのだ。あの声の調子ではかなりの深傷だろう。

彼を、助けなければならぬ。次の瞬間、そう思っていた。理屈ではなかった。兵士として叩き込まれた条件反射のためでもない。戦友愛などというものは、幻想にすぎない。戦友を助けるために、自分が代って弾を浴びようというおろかものはいない。——とくにこの無意味な戦争ではだ。

だが、キングの声にふくまれていた何かが、辰巳を揺り動かしたのだ。奇妙に澄んだ、哀しげ

なひびき。それが、辰巳の心の深みのどこかに、ぴったりとはまったのである。

と思った時に、すでに動いていた。全身をバネにして、立ち上がった。匍匐前進して近づく手もあったろう。だが一気に突っ走る手に、辰巳は賭けたのだ。敵は、追い込んだ相手が、それほど大胆な行動を起こすとは思うまい。

M16を、ブツシュに向かって盲射ちにぶっぱなしながら、辰巳は走った。軍曹の位置はすでに計算し、意識に定めてあった。M16は軽い不連続音を立てながら、重い反動を辰巳の手首に与えた。——M16は、この戦争でアメリカ陸軍が正式採用した、二三口径の襲撃ライフルである。軽くて高性能な傑作自動小銃で、口径が小さく有効射程も短かいが、弾の初速は大きく、ジャングル戦などの近距離戦闘に威力を発揮する。

ボタン一つで、単発にも連続発射にも切り換えが出来る。辰巳はむろん連続発射にし、マガジンの全弾をブツシュにまき散らそうとしていた。

自分の呼吸音が、雷鳴のようににはげしく耳にひびいた。うずくまっている軍曹の緑の戦闘服が一瞬視界に入った——その時、右の肩口に、にぶく重い攻撃が来た。文字どおり、棍棒で殴られたかのような衝撃だった。

辰巳は数回転し、頭から草地へ突っ込んだ。射たれたという思いはなかった。ただ、自分の体に加えられた攻撃のすさまじさに対するおどろきだけがあった。

数秒、荒い息を吐きながら、白い虚脱の中をさまよっていた——ようやく、現実感覚が戻って来て、軍曹の傍に並んで横たわっている自分を発見した。

「……サム……お前か。お前が、来てくれたのか？……」

軍曹の呻きが聞こえた。黒い顔が、今は灰色に近い色になっている。ねじれた人形のように横たわった体の、両股のまわりが赤ペンキをぶちまけたようになってゐる。必死に首をねじつて、辰巳を見つめていた。

辰巳は、ニヤリとした。苦痛は、まだ来ない。右の肩は、いつさいの感覚もなく、しびれてゐるだけである。軍曹の顔を、間近にのぞき込んだ。

ハリー・グ・ゴング・キング軍曹。その仇名のように、身長は二メートルに近く、体重はたつぷり百キロはある。格闘術の名手で、中隊では、素手で彼にかなう者はいない。

辰巳勇を、サムと呼び始めたのも、彼である。辰巳の名をサムライにかけたのだった。タフネスとガッツ……職業軍人の持つべき二つの美点を、充分にかなそなえている。辰巳が、もっとも信頼をおいていた仲間の一人だった。

その彼が今は、ただ呼吸をしているだけの肉塊と化している。戦場ではありふれている皮肉だ。だが辰巳には、にわかには信じがたかった。

「ああ、来たぜ、軍曹。もう安心しろ」

辰巳は呟いた。

「あんたを一人にはしない。ゆっくりと休んでいていいぜ」

再び仰向けに横たわり、顔を歪めた。その自分のことばに、おかしみを覚えたのだ。——たしかに、俺たちは孤独ではない。だが、このあとはどうするのだ。

かすかな爆音が、その時幻聴のように近づいて来た。やがて、くっきりと辰巳の耳に届いた。

辰巳の胸に歓喜が爆発した。無線の応援依頼を受けて来たのだらう。まぎれもない戦闘への爆

第一章 招集

1

辰巳勇は、千円札を運転手の掌に置き、タクシーを下りた。

使い込まれた皮のスーツケースを提げ、おちついた足取りで、玄関の回転ドアへと歩いて行く。その前に立っていた、人を待っているらしい二人連れの男が、あわてたように辰巳を避けて、動いた。彼らにとつても、ほとんど反射的な動作だったようである。

辰巳の足どりは、わずかに右足が跛を引いているが、べつだん異様なものでもない。表皮のトレンチコートに包まれた体は、むしろ小柄である。スポルディングのサングラスが、唯一凄みをもたらししているともいえたが、全体には目立たぬ姿だった。

にもかかわらず、男たちが体を引いたのは、辰巳が無意識のうちに発散させている強烈な体臭を、敏感に感じ取ったためだろうか。死線をくぐりぬけて来た男だけが持つ、屈折した、血の匂いがかすかに漂う倦怠。それが、おそらく辰巳の体にはまつわりついていたのだ。

辰巳自身は、意にも介さず、回転ドアを体で押して、ロビーの中へと足を踏み入れた。むっとする温かさと、大ホテルのロビー特有の、奇妙に取り澄ましたざわめきが、彼を包んだ。真紅の

じゆうたんが敷かれた広大なロビーの中央には、エレベーターブロックが見え、右手の奥にはレストランや売店、左手にはフロントが見える。

着飾った若い男女が、顔を上気させてそこに屯し、スーツケースを満載した手押車を、ボーイたちが額に汗をにじませながら運んでいる。外国人客の姿も多い。東京でも一、二を争う大ホテルと聞いただけのことはあった。

だが辰巳の表情は変らなかった。十年ぶりに帰って来た日本は、たしかにおどろくほどの発展をとげている。東京などは、記憶をいっさいあざむくほどの変貌ぶりだった。気持ちがいじみた交通ラッシュは、ニューヨークのもつ狂気に、さらに近づいているともいえた。

だがそのおどろきは、辰巳の胸の核心を動かすには至らなかった。都会の華々しさは、すべてが虚像にすぎないことを知っている。

辰巳は、ベトナムのジャングルと湿地帯の熱気の中で、死と隣り合わせることによってくつきりに見える真実を知ってしまったからだ。

フロントへ、ゆっくりと足を運んだ。チェック・インのカウンターの前に立った。紺のスーツ姿のホテルマンが、仮面じみた微笑を浮かべて近づいて来た。

「辰巳、勇というものです」

辰巳は、ことばを区切りつつ発音した。むろん日本語を忘れたわけではないが、どこか錆びついていることはたしかである。奇妙に聞こえることは承知で、そうしたのだ。

若いフロントマンの表情がかすかに動いた。里帰りした二世かと、判断したらしい。一瞬、唇が歪んだ。辰巳のイントネーションは、慎重すぎてどこかこっけいだったのだ。

「ご予約されていますか？」

辰巳のサングラスを、小首をかしげるようにして見た。本人は気付かなかったのだろうが、明らかに侮り^{あなど}の色が、その表情に透^すけて見えた。

「その筈ですがね。速水^{はやみづ}澤子^{さわこ}さんに、呼ばれて来ました。彼女の名で、部屋が取つてある筈だから……」

答えながら、サングラスを左手で外した。フロントマンの顔が、一瞬こわばった。左の目尻に走る傷に、気付いたのだ。二センチほどの傷だが、赤い引きつれが、まだ残っている。おそらく終生消えることはないだろう。医者は、植皮手術をすすめたが、辰巳はその気になれなかった。それは、体に残る傷の、ほんの一部にすぎない。辰巳はもう面倒だったのだ。

しかし、その傷が、辰巳の顔に、暗い迫力にみちたアクセントを与えていることは、疑いなかった。

フロントマンは、打つて変ったようにきびきびと動き始めた。すばやく予約カードをチェックし、いんぎんに答えた。

「はい、たしかに速水さまはお泊まりです。辰巳さまのお部屋も、お取りしてございます。

それから、辰巳さまがご到着次第、至急お目にかかりたいというメッセージも、届いておりま
すが……」

「彼女の部屋は、どこ？」

フロントマンが告げた部屋のナンバーを、辰巳は頭に刻み込んだ。チェック・インし、自分の部屋の鍵を——十二階だった——受け取った。ボーイを呼びかけたフロントマンに、かぶりを